

同志社人の歩み

松山義則



ご卒業のときをおむかえになりました。心からおよろこびを申し上げます。この一年あまり以前から世界の状況は急激に変化をはじめ、激動の日々をくりかえしています。みなさんは今までにない歴史的な厳しい変動する社会に向って門出されることとなりました。われわれは世界地球宇宙というグローバルな現実と関係なく生きることができません。このようなときにこそ、広い視野と見識をそなえて、どのような変動にも対応できる人物でありたいと思います。

同志社の創立者、新島襄先生が誕生されたのは一八四三年、天保十四年の正月であり、幕末の風雲ただならない時代でありました。江戸、神田一ツ橋にある安中藩邸で武士の嫡男として成長した先生は、封建制度の枠のなかで社会的、政治的動揺を身をもって体験していました。薩長藩閥の新しい政治的勢力が抬頭し反幕の風潮が高まり、また、列強の侵略が周辺に迫り、江戸湾上にうかぶ

オランダ軍艦の威容に接して若き心は激しくゆさぶられていました。先生は世界を知りたい、世界の思想、学問にふれたいという願いをつよくもたれましたが、当時、禁書でありました漢訳の聖書を読み、天地の創造主なる神を心にみることでできました。また、アメリカ人ブリッジマン著の「アメリカ合衆国歴史地理」にふれて、選挙で大統領を決める制度をはじめアメリカの学校、施設、工場などについて学びました。海外にわたって広く世界のことごとくを知りたいという希望はさらにつのり、ついに禁をおかして脱国することとなりました。

現在、われわれは情報化社会にあつて、即時に世界各地での動きを見聞することができます。新島先生たちは、漢訳の書物や、英語、オランダ語を通して得られた僅少な情報からその人の想像力をもつて世界を考えたのでありましょう。先生が欧米に学ぶこと十年、その間に考えられたことは、「欧州文明の現象繁多なりといへども、概してこれを論ずれば、基督教の文明にして、基督教の主義は、血液の如く、万事万物にみな注入せざるはなし、而して我邦に於ては、ただ外形の文明を取つてこれを取らざるは、これなお皮肉を取つて血液を遺すものにあらざや」でありました。泰西の文学、科学の根底にキリスト教の精神があるという信念であり、また「吾人は基督教を拡張せんが為に大学校を設立するにあらず、ただ基督教主義は、実に我が青年の精神と品行とを陶冶する活力あることを信じ、この主義を以て教育に適用し、更にこの主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ」と主張されました。新島先生が念願された同志社の教育理想はキリスト教主義にもとづいてその精神と品行を陶冶する人物の養成にあります。そのことは国際人としてグローバルな視野を堅持することでもあります。先生が若き日に情熱をもつて世界を見ようと意欲して行為されたなかに体现されています。また、キリスト教精神にもとづく良心教育を強調し、同志社が「その

目的とするところは、ひとり普通の英学を教授するのみならず、その徳性を涵養し、その品行を高
尚ならしめ、その精神を正大ならしめんことを勉め、ひとり技芸才能ある人物を教育するにとどま
らず、いわゆる良心を手腕に運用する人物を出さんことを勉めたり」と書いておられます。先生の
念願はキリスト教精神にもとづく良心、自由、自治、自立の人物の養成にありました。「良心を手腕
に運用する人物」、「良心の全身に充滿する」人物を求めました。良心とはそれぞれの人の心の深奥
にあつて神に対峙し、その声をすなおに聞いてそれにしたがつて行為することでありましょう。し
かも人間は有限であり弱く、罪のなかに生きる自己をみつめ救いを求めつつ歩む人間でありたいと
いう願いでありました。良心的に生きることは、自己が正義の主体であるという信念や他人をその
基準をもつて批難攻撃することからはほど遠いものであります。また、人間は本来、自由でありた
いと願うものであり、人類の歴史は抑圧するものから逃れ、自由を求める人々の戦いの歴史であり
ました。しかしきまま勝手な自由はまた他人を不自由、拘束する以外のなものでもなく、人類は
それをくりかえしてきました。「真理は自由を得さすべし」という言葉は意味ふかい示唆をもつてい
ます。真理にふれたとき、それを体験したときに、人間は限らない自由を自らのものとするのであ
りましょう。先生は「自由のうちにも、おのずから秩序をたもち、束縛のない中にも、おのずから
限度をわきまえているもの、すなわち、自分は自分一己の意見をもつていて、仰いでは天にはじ
ることなく、また地上の何人にも、はじることなく、みずからの手腕をふるって、みずからの運命を
きりひらくような人物」を求めました。「自由の内おのずから秩序を得、不羈の内おのずから裁制あり」そ
して「自みづから自個の手腕を勞して、自個の運命を作為するが如き人物」を養成したいと願いました。
自分の運命は自分の手腕を勞してきりひらくことにありましょう。さらに、先生は、自治、自立の

人間を求めました。「その生徒の独自一己の氣象を發揮し、自治自立の人民を養成するに至つては、これ私立大学特性の長所たるを信ぜずんばあらず」と先生の言葉にあります。自己を治め、自立する人物を養成したいと言う願ひでありました。

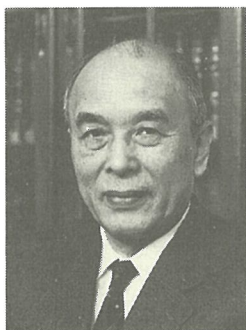
同志社で学ばれたみなさんが、神を敬い、世界の人びとと相たずさえ、良心、自由、自治、自立の人物として世界の各地各界でよき働き人となつて下さることを思います。人々はひとりひとり個性をもち、それぞれの道を自らの力で歩みとおさねばなりません。「花のいのちは短くて、くるしきことのみ多かりき」と歌われているように、これからの人生は多難な労苦に満ちているでしょう。旧約聖書には「われらのよわいは七十年にすぎません。あるいは健かにあつても八十年でしょう。しかしその一生はただ、ほねおりと悩みであつて、その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです」とあります。みなさんが人生の苦難のなかにあつてこれに耐え、自己の良心の声を耳にして自治自立の途をすすまれることを願っています。激動の世界に立つて、荒れくるう風雨のなかにあつて、孤独にあつても、神は味方であり、神の守りがあることを信じて、希望と夢をもつて人生の道を歩みつづけて下さい。

ご健康とご多幸を祈ります。

(同志社総長)

神を識り 独り立ち 強くあれ

笹田友三郎



海のかなたから燕の便りが届くようになりますと、春は足早に動きはじめます。年々歳々かわることなくめぐってきますが、今年の春は誰のためのものでもありません。卒業生諸君と学位を取得された諸君のものであります。心からお祝いを申しあげます。

諸君の生まれた一九六〇年代の後半は、わが国が経済大国への地固めをした時期にあたります。繁栄のなかで諸君は豊かな生活を最大限に享受してきました。情報化社会の頭脳細胞である半導体素子の開発を通じて技術革新の仕組みを完成させ、柔軟で強力な経済システムを構築することができたからであります。

今日わたくしたちが暮している情報化社会は、コンピュータの支配にまかされているということもできるでしょう。わたくしたちのまわりでは、ぼう大な情報量が驚異的なスピードで伝達され処理されていますが、そればかりではありません。まるで宇宙空間そのものを自らの手のなかにおさ

めようとするかのように、ロケットは乱舞しております。その技術は正確無比ではありませんが、ひとつまちがえば混乱と悲惨につながりかねないことも、地平のあなたの騒擾を通じて、わたくしたちは目のあたりにしたばかりです。といいましても、ゆらぐことなく天にある無数の星は、そして爛漫たる自然は、この騒擾とはなんのかかわりありません。

古代においても単一の価値への志向は強かったのでしょうか。ノアの子孫たちが天まで届く塔のある町を建て、有名になろう、そして全地に散らされることのないようにしようとしたとき、神の怒りにふれました。彼らの言葉は混乱し、互いの言葉が聞き分けられなくなり、彼らは全地に散られ、彼らはこの町の建設をやめたのです。この町はバベルと呼ばれました。高い象徴性をもって描き出された物語にあるバベルはバビロンのことで、「神の門」を意味しておりました。後に混乱の意味で呼ばれるようになったのは、この虚栄の塔が人間の自己高揚と力の誇示にほかならなかったからであります。至上の価値としての技術文明の礼賛と経済成長の追求も、人間の欲望の象徴とよばれるバビロンにもたとえられるようになりました。

人知を上まわる自然の摂理といいたしましょうか。万物のすべてに調和を保たしめている宇宙の秩序といいたしましょうか。いや、それをも超越した大いなる意志の働きは、これを神と呼ぶこともできるでしょう。不遜な引用を許していただけるなら、神を識ることなくしては「家を建てる人の労苦はむなし、町を守る人が目覚めているのもむなし」という言葉があります。わたくしたちはこの言葉に謙虚に耳を傾けなければなりません。朝の紙面でお馴染みの「折々のうた」という欄に連載の筆を執っている詩人は、つぎのように問いかけております。

日本人の顔は過去のどの時代よりも余裕と威厳と和らぎを感じさせるようになったでしょう

か。その表情に幸福感と充足感がたゆたっているでしょうか。人びとは自らの生き方に信念をもち、他者に敬意を抱き、礼節をごく自然に身につけ、心からの笑い声を咽喉の奥から発することができているでしょうか。過去の風俗習慣を愚弄することなしに、新しい風俗習慣の創造を豊かな気持ちでなしているでしょうか。不思議といえば不思議なことです。日本人はこの氾濫するほど豊かな情報化社会に生きながら、もつとも単純に生活の豊かさを示す属性をなにひとつもつていないようにみえるのです。

詩人の言葉は、わたくしたちの胸に鋭くつきささってまいります。戦後の瓦礫のなかでわたくしたち日本人が切実に願ったことは、物質的にも金銭的にも現実のものとなりました。わたくしたちが眼前の幸福を追求するだけでしたら、今日のわが国の現状で満足できるかもしれません。しかし、わたくしたちひとりびとりの心の底に、ただならぬ空虚がふくらんできました。詩人の指摘にありますように、眼前の現実そのものが気がかりになりはじめたのです。わたくしたちが失ってしまったものの、物質的金銭的なものを超越した価値を、いまいちど自らの手にとり戻さねばなりません。

いま、高等教育における知育を実効あらしめるために、立学の精神が問い直されようとしております。新島はご承知のように、知識をはたらかすところの品性や精神を養うには、実に活きた力あるキリスト教主義でなければできないものを信じて、キリスト教主義を徳育の基本に据えました。新島がこのように教育論議を徳育にしばつたのは、けだし達見といえるでしょう。人間の知恵が道徳の規制をうけなかったとしたら、社会が良い方向にすすむはずのないことは事実がこれを証明しております。新島はつとにこのことを察知していたにちがいありません。

『新島襄全集』の第二巻は新島の説教・演説稿にあてられています。このなかで新島もしばしばふれておりますが、古代の東洋思想では最高の主宰者は天であります。天は日月星辰を正しく運行させ、春夏秋冬を交代させております。地上の万物も天の所産であります。「人間はどこからきて、どこへゆくのか」。この問いかけに耳をすませ、自己の内面に目を向けて、諸君がいまここにあることの意味を確かめてください。宇宙の慈悲と善意に、その背後にある神のはからいに、そして新島の熱い祈りに思いをいたしてください。諸君の人生には新しい展望がひらけることでしょう。

花に嵐のたとえもあります。これから独り立とうとしている諸君は身も心もすりへらすような思いで自分とたたかい、世間とたたかってゆかねばなりません。もつとも大切なものは精神の強さであります。自らの生き方に信念をもち、自分に対しても他者に対してもより人間らしく、より誠実に、強く生きてください。そのためには確固たる立脚点があればなりません。新島はそれを「良心」に求めました。これこそ同志社人のレーゾンデートルであります。十年経って、諸君の歩んだ歴史のうえに何が定着しているでしょうか。二十年経って、新島が諸君に託した高貴な目的がかなえられているでしょうか。諸君の成長を、本学に職を奉ずるわたくしたちの誇りにさせてください。もの言わぬ雁でさえ一年一度は帰ってくると、南宋の七言絶句には詠まれています。諸君、一年一度はこの母なる学び舎に帰ってください。リュニオンの集いが諸君を待っております。

諸君のご多幸とご健康を祈ります。

(同志社大学長)

グローバルな視野に立って

石田 章



同志社女子大学および同志社女子大学短期大学部を卒業される皆さん、ご卒業おめでとうございます。また、今回大学院の修士課程を終えられた九名の皆さんにも心からよろこびの言葉を贈りたいと思います。まず、大学院修了の皆さんにひと言。皆さんは、学問研究という長い道程の中の一つの区切りを今通過されたのであって、これからが本当の学究生活のはじまりなのだ、ということをお心に

められ、学問研究への新たな第一歩を踏み出されることを願っています。

さて、最近の社会のさまざまな分野における女性の進出と活躍ぶりはまことに目覚ましいものがあります。社会が女性の持つすぐれた能力を積極的に受け入れ活用することに意を注ぐようになってきたことはもちろんですが、しかし同時に、あなた方の先輩たちが、長年にわたって、それぞれ責任ある立場で、地道にしかし立派にすぐれた働きをしてこられた努力のたまものであることを覚え

て、皆さんも、それぞれに与えられた場で、自分の力を存分に発揮してください、心から願っています。

ところで、私は新たな門出を迎える皆さんの前途が限りなく明るく洋々たるものであることを信じ、また心からそれを願っています。けれどもまた一方で、あなた方がこれから出て行く世界は、残念ながら実に不透明で、さまざまな危機や不安を一杯にはらんだまことに危うい世界であることも認めざるをえません。この一、二年間に私たちが見てきた世界の動きと変容は、私たちが今否応なく歴史の巨大なうねりの真つ只中に身を置いているのだ、という認識をあらためて私たちに強く迫るものでした。ある意味では、それは実に重い、めつたに会おうことのない貴重な体験であったと言えます。しかし同時に、次には一体何が起こるのか、私たちはほんとうに大丈夫なのか、という強い不安と危機感を強いられる毎日でもありました。

それが一つの頂点に達したのが、今年一月十七日に勃発したペルシャ湾岸戦争です。昨年夏のイラク軍のクウェート領への侵攻によって引き起された湾岸危機は、イラク軍と多国籍軍との戦闘開始によって一気に破局的様相を呈しはじめました。私たち一般市民がこれほどまでにテレビのニュース番組に関心を持ち、テレビの前に釘付けになったことは絶えて久しくなかったことでした。もちろん、ハイテク時代の戦争の状況が生々しく画面に映し出されるのを、一種スリリングなドラマを見るような気持ちで見るむきも皆無とは言えませんでした。しかしそれ以上に、私たち一人一人の心の奥底に、明日は世界はいったいどうなるのか、私たちの生活はほんとうに大丈夫なのだろうか、という拭いきれない不安感、危機感が付きまとい、離れなかったからに他なりません。湾岸戦争を通して如実に実感されるように、現代の戦争は過去のそれとは本質的に意味を異にします。観

念の上では私たちも充分頭に入れていたはずの、一步間違えば地球全体の破滅につながる現代の戦争の実体が、まさに現実のものとして今私たちの目の前で展開されつつあるのです。

現代では、たとえば地球の温暖化現象といった環境汚染問題ひとつをとってみても、問題を人類や地球全体の規模で考えていかなければ破局は目前に来ている、それが世界の現実です。地球や人類全体の安寧なくして、個人の幸福も家族の平和も、さらに言えば、企業や国家の安定した繁栄もありえないのです。やがて確実に二十一世紀を生きるあなた方は、この意味でも、真にグローバルな視野に立った人間として思考し、行動することが強く求められているのです。

それにしても、湾岸戦争のニュースを見るにつけ、人間はどうしてこうも性懲りもなく戦争を繰り返すのであろうか、とつくづく考え込んでしまいます。そう考えながら、私はふと、紀元前四〇〇年頃に書かれたギリシャのある古典喜劇を想い出していました。アリストパネースの『リュシストラテ』という喜劇です。リュシストラテというのはこの喜劇の女主人公の名前ですが、この名前には「軍隊を解散させる女」という語義が含まれています。アリストパネースがこの喜劇を書いたのは、当時スパルタとアテナイとの間に延延と続いていた泥沼のような戦争状況のさ中のことで、彼はこの一見荒唐無稽とも思える喜劇を通して、実は民衆たちの心の底に渦巻いている厭戦思想と平和への渴望を痛烈に描き出しているのです。物語は、明けても暮れても戦争を繰り返すしか能の無い男たちに業を煮やしたギリシャ全土の女性たちがリュシストラテのもとに結集し、男たちに対して一斉に性的бойコットを決行したため、さすがに男共も困り果て、遂に平和をとり戻す、というもので、奇想天外な猥雑にしてこっけい極まりない喜劇なのですが、しかし、考えてみると、アリストパネースは、すでに二四〇〇年も昔に、無益な戦争を繰り返す人間の、とり

わけ男たちの愚かしさと、その中で、何時の世にあっても平和を守る主役は女性であることの真実を、この喜劇を通してものの見事に突いているように思われます。

私たちの世界は、いかなる事情があれ、まず平和であらねばなりません。そして、女性こそが、その平和を守るいちばんの使徒なのだということを、あなた方一人一人が心に刻み、広く世界に視野を向けて、これからの新たな人生を歩んでいくてくださるよう、心から願っています。

ご多幸を祈ります。

(同志社女子大学長)